

緑茶摂取と前立腺がん発症率との関連：大崎国保コホート研究

No association between green tea and prostate cancer risk in Japanese men:
the Ohsaki Cohort Study.

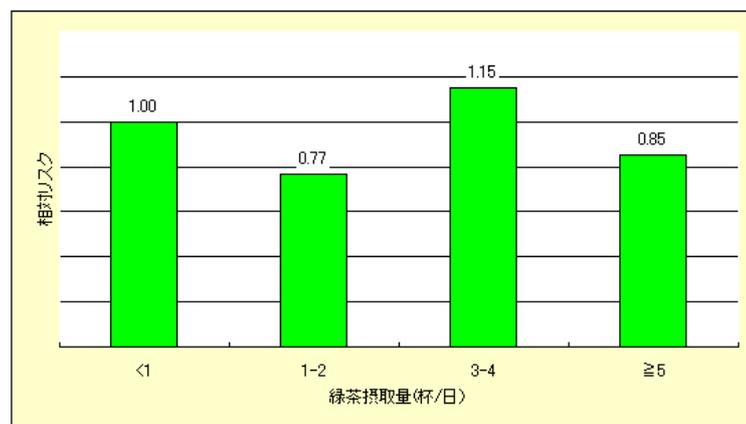
2006年 British Journal of Cancer 発表

緑茶を多く飲む人でも前立腺がんリスクは低くならない

緑茶による前立腺がんの発症予防効果の可能性が注目されています。そのメカニズムについては、緑茶に含まれるポリフェノールによる抗酸化作用、腫瘍細胞の細胞死の誘導、腫瘍の成長・浸潤の抑制や腫瘍血管新生の抑制などが指摘されています。しかし、疫学研究は3件（症例対照研究が2件、前向きコホート研究が1件）しか行われておらず、その結果は一致していません。日本における一人あたりの緑茶消費量は世界一であり、わが国の前立腺がん罹患数の少なさはこのことと関係しているかもしれません。そこで私たちは「大崎国保加入者コホート」のデータを解析して、緑茶と前立腺がんリスクとの関連を検討しました。

その結果、緑茶の摂取頻度が「1日1杯未満」と答えた人が前立腺がんを発症するリスクを1.00とすると、「1日1~2杯」と答えた人の相対リスクは0.77、「1日3~4杯」と答えた人では1.15、「1日5杯以上」と答えた人では0.85と、日常生活での緑茶摂取量が多くても前立腺がんを発症するリスクは低くなりませんでした。

コーヒーや紅茶と前立腺がん発症率に関連があるかどうかを調べてみましたが、コーヒー・紅茶ともに、たくさん飲むほど前立腺がんリスクが低いという結果は出ませんでした。



研究データについて

ベースライン調査：1994年10月から12月までに、宮城県の大崎保健所が管轄する14市町（当時）に居住する、40-79歳の国民健康保険の加入者約5万5000人を対象に、生活習慣に関する自己記入式アンケートを配布し、5万2029人から有効回答を得ました。回答率は95%です。

生活習慣に関する調査内容は、病気の既往歴と家族歴、体型などに関することなどの健康状態、運動習慣、喫煙、飲酒、食事などの生活習慣、職業、婚姻状況、学歴などの社会的な状況から構成されています。

追跡調査：ベースライン調査に答えていただいた方のうち、追跡開始以前に国民健康保険から脱退した方774人を対象から除外しました。今回の研究に関連する質問への回答に不備のあった方、がんの既往歴のある方を、分析の対象から除外した1万9561名の男性を対象としました。ベースライン調査時から2001年12月31日までの7年間の追跡調査で、110名が前立腺がんと診断されました。

追跡期間中に、研究対象地域では前立腺がんに対する集団検診は行われませんでした。

緑茶の摂取について

いずれのアンケートでも、緑茶、コーヒー、紅茶を飲む頻度、飲酒、喫煙、食事などの生活習慣、病気の既往歴などを尋ねています。緑茶を飲む量に関する回答は「まったく飲まない」「時々」「1日1-2杯」「1日3-4杯」「1日5杯以上」の5つから選んでもらいました。「まったく飲まない」「時々」と答えた方が少なかったため、これらの方を「1日1杯未満」として解析を行いました。この地域の人が飲む緑茶1杯の分量はほぼ100mlでした。

研究の特徴と限界について

緑茶を多く飲むと前立腺がんの発症リスクが低くなるという中国の研究が報告され、注目されています。これに対し、日本や米国からは関連がないという研究が報告されており、結果が一致していません。中国や日本の研究が、すでに前立腺がんを発症した人を対象に過去を振り返って調査した症例対照研究であるのに対して、私たちの宮城県の研究は一般市民を対象にした前向きなコホート研究です。比較的多くの前立腺がんの症例も含まれており、より信頼度の高い結果が出ています。また、他の条件の影響をできるだけ取り除いて解析し直した場合でも、結論は変わりませんでした。

本研究では、自己回答によるデータを用いたため、必ずしも回答が実際と同じとは限らないのではないかと考えられます。しかし、アンケートの回答による緑茶の摂取量は、実際の食事記録と関連していたという結果が得られていますので、大きく外れているとは言えません。

また、本研究の質問紙では、1日5杯以上の高容量の緑茶摂取量については分類しなかったため、高容量の緑茶摂取で関連があるのではないかと考えられます。しかし、実際の食事記録から「1日5杯以上」と答えた方々の半数以上は1日7杯以上の緑茶を摂取しているという結果が得られていますので、高容量の摂取による影響を見ることができなかったとは言えません。
